釈迦堂遺跡と土偶の謎

鯉のぼりは鮨屋の広告？

インドの友人が奥さんと一緒に来日した時のことです。拙宅に一泊した彼らを、富士五湖に案内することになりました。まだ雪が残る初夏の富士山と湖の美しさに感激していた彼らが、車窓から見える鯉のぼりを指して、盛んに何かを話し合っています。

どうやらご主人の方は、ポールの先端についている矢車に注目して、あれは家庭用の風力発電機だろうと推測したようです。ところが奥さんの方は、それでは風に泳いでいる何匹もの鯉は必要ない、鯉のぼりは湖の漁師が大漁を祝って掲げているのだと主張しています。

発電器説をひっこめたご主人は、今度はすし屋の広告説を展開し始めました。昨日、湖なんかない町中でも見かけたから、漁師の家とは限らないと言います。

鯉のぼりが男児の成長や出世を祝う端午の節句の風習であることは、日本人なら誰でも知っています。故事来歴に詳しい人なら、鯉が龍門の滝を登ると龍となって天をかけるという中国の故事が元になっていることや「登龍門」いう言葉がここから来ていることもご存じでしょう。

しかし文化、風習が違うと、鯉のぼりは何かという問いはとたんに難しくなります。これは鯉のぼりが実用的なものではないからです。たとえば日本の古くからある和包丁をインド人に見せ、これは何かと尋ねると、大抵キッチン・ナイフと答えることができるでしょう。実用的なモノは機能が形を決めています。切るという機能を果たすためには、洋の東西を問わず台所の包丁は同じよう

な形にならざるを得ません。

しかし鯉のぼりに実用的な機能はありません。男の子に降りかかろうとする災厄や魔物を除けてくれるという幻想を託した一種のシンボル、呪具です。意味をもつものはそのシンボルの背景にある文化や風習です。だからこのような文化や風習を共有していない外国人は、鯉のぼりの役割を捉えることができません。

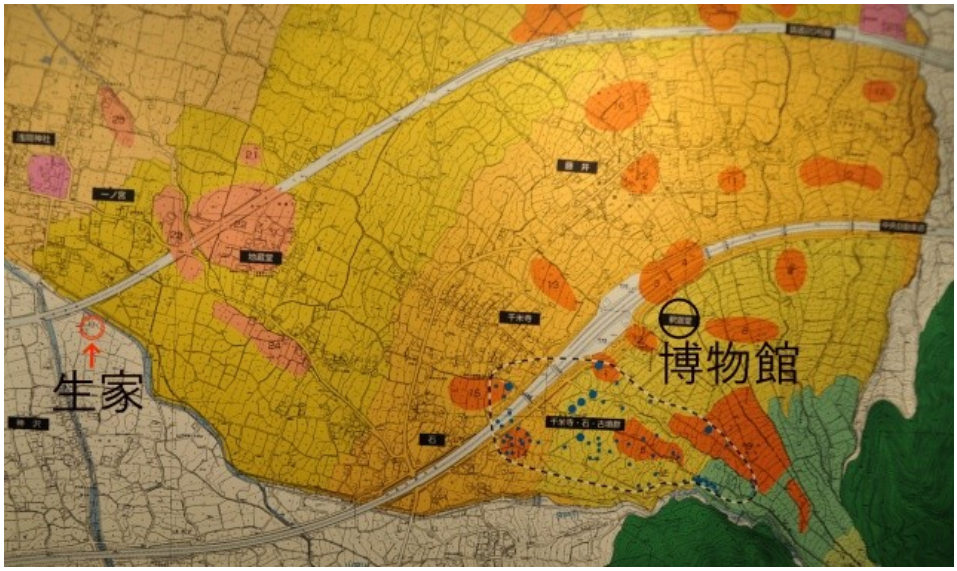
ここまでは今日の話のマクラですが、これから書くのは土偶の話です。土偶は縄文時代に造られた土製の人形です。私の生家のすぐ近くにある釈迦堂遺跡から千二百体近くも出土し、大きな注目を浴びました。

日本で今まで出土した土偶の総数が約一万八千体と言われていますから、その数の多さだけでも特筆ものです。土偶は何のために作られたのか、考古学の分野では大きな謎でしたが、釈迦堂遺跡の土偶の出土状況からこの謎に迫るいろいろなことが分かってきました。

釈迦堂遺跡と博物館

まずは土偶について語る前に、わが故郷、山梨県笛吹市一宮町の誇り、釈迦堂遺跡博物館について紹介しましょう。

釈迦堂遺跡は地図右下の御坂山塊から流れ出た京戸川が、山地を抜けた所で多くの砂礫を堆積させた典型的な扇状地の上にあります。この京戸川扇状地は扇状地という地形の典型的な例として、私の使った中学校の地図帳にも載っていました。地形は右下から左上に緩やかに傾斜しており、現在ではぶどう畑や桃畑が広がる日本で有数の果樹栽培地です。



黄色く塗られた扇状地をよぎり、二本の白い線が走っていますが、上が甲州街道、下が中央高速道路です。

オレンジ色や桃色に塗られた所が遺跡が発掘された場所で、釈迦堂遺跡と博物館は、ほぼ扇状地の真ん中に位置しています。

私の生家は右端の赤い丸の地点です。釈迦堂遺跡博物館はそこからほぼ真東に一・五キロの距離で、歩いて二十分ほどです。何万年前も前から何回も流れを変えた京戸川は、現在は私の生家の脇を流れています。川は私の幼少の頃の遊び場で、泳いだり魚を釣ったり焚き火をしたりして遊んだものです。伊勢湾台風の時は濁流が家のすぐ近くまで押し寄せ、怖い思いをしたこともあります。

さて、釈迦度遺跡は昭和五十五年～五十六年の中央高速道路の工事に伴って発掘された遺跡群の総称です。この地にはおよそ一万五千年前の縄文時代前期から現代まで連続して人間が住んでいたことが、出土物から明らかになっています。

この辺の畑を耕す際に土器のかけらが出てくることは、地元では古くから知られており、私が子供のころは掘りだされた土器の破片が畑の脇に無造作に積み上げられていたものです。

発掘に伴って出土した竪穴式住居址や土器、石器類などは膨大な数にのぼりました。昭和六十三年には土偶一一一六体が、平成七年には土器・土製品三四一〇点、石器・石

製品九一五点などが重要文化財に指定されています。博物館はこれらの出土品を保存・展示するための施設として、昭和六十三年十一月三日の文化の日にオープンしました。

博物館を建設するにあたって、もめたのが建設場所でした。遺跡は勝沼町と一宮町という二つの町にまたがっています。どちらの町に建設するか綱引きがあったのです。

決め手は景色でした。標高が四百メートルから五百メートルの扇状地からは、甲府盆地や周囲の山並みのすばらしい展望が得られます。「一番眺めのいい場所に造ろう」という良識が通り、現在の場所に決まったのですが、場所はちょうど両町の境界付近にあり、中央自動車道の釈迦堂パーキングにも隣接しています。

釈迦堂パーキングは博物館見学のために、徒歩で外部にアクセスできる珍しい高速道パーキングです。

高速道路は危険防止のために外部からアクセスできないようになっているのが普通です。博物館への観光

客誘致のために、パーキングからの出入り口の設置という地元の要望を、道路公団は安全を理由にかたくなに拒否したといいます。

結局、当時の自民党副総裁で道路行政に絶大な権力をふるっていた金丸信から道路公団総裁・宮繁護への一本の電話で、パーキングから博物館へのアクセス道路設置が決まったという裏話が地元ではささやかれていました。

上の写真は博物館の二階ロビーから撮った南アルプス・白根三山の山並みと甲府盆地です。右から日本の第二の高峰北岳（三一九二m）、真ん中が間ノ岳（三一八九m）、左が農鳥岳（三〇二六m）です。

ここから見ることができる山々の名前をすべて同定した幅約三メートルもある展望図のパネルがロビーに

は置かれていますが、元国鉄中央線の車掌で、中央線沿線の山の権威・故山村正光さんが協力して作成されたものです。

余談になりますが、山村さんは『車窓の山旅・中央本線から見える山』、『甲斐の山旅・甲州百山』、『山梨県の山』、『「富士を眺める山歩き」など山梨の山に関する著書があり、私は山に登る前に必ず目を通すことにしています。いずれも単なるガイドブックではなく、史実やエピソードなど山に関する蘊蓄が随所に語られる名著と言えるでしょう。

ばらばらに捨てられた土偶

さて博物館に関するエピソードはこのぐらいにして早速、中に入ってみましょう。二階展示室に入ってまず目につくのは、壁一面に並んだ子供の顔と土偶の顔の写真です。子供はすべて地元の子供たちで、中には私の見知った顔もあります。もっとも写真が撮られたのは二十年以上も前のことですから、どの子も今は二十歳すぎの大人になっていることでしょう。

この展示は子供の顔にもいろんな表情がありますが、縄文時代に造られた土偶にもいろいろな表情があるということを言いたいのでしょうか。パネルの土偶の顔を見ると、笑ったような顔、泣き出しそうな顔、何かを叫んでいるような顔、にんまりしている顔などさまざまです。しかしある共通した特徴を読み取ることは可能です。

まず一番の特徴は横長の顔です。次に細い切れ長の目と開いた口が印象的です。眉と鼻が一体になってマクドナルドのマークのようになっています。いろんな頭の形がありますが髪型でしょうか、それとも帽子をかぶっているのでしょうか。眼の下に刺青をしたものや耳にピアスの穴を開けているようなものもあります。

出土した土偶は一一一六体で、このうち縄文前期のものが七体、後期のものが一体、他はすべて中期（四八〇〇～四〇五〇年前）のものです。

一つの遺跡で出る土偶の数は普通極めて少なく、釈迦堂遺跡のように大量の土偶が同時に出てくるのはかなり珍しいのです。かの有名な青森の三内丸山遺跡からは約一七〇〇体の土偶が出土していますが、釈迦堂の出土数はそれに次ぐものです。

三内丸山遺跡は祭祀用に使われたと思われる大きな掘立柱建物が存在した跡が見つかり、その規模からいっても周辺のムラとは異なる特殊な役割を持つムラだったのではないかと言われていますが、果たして釈迦堂はどうなのでしょう。

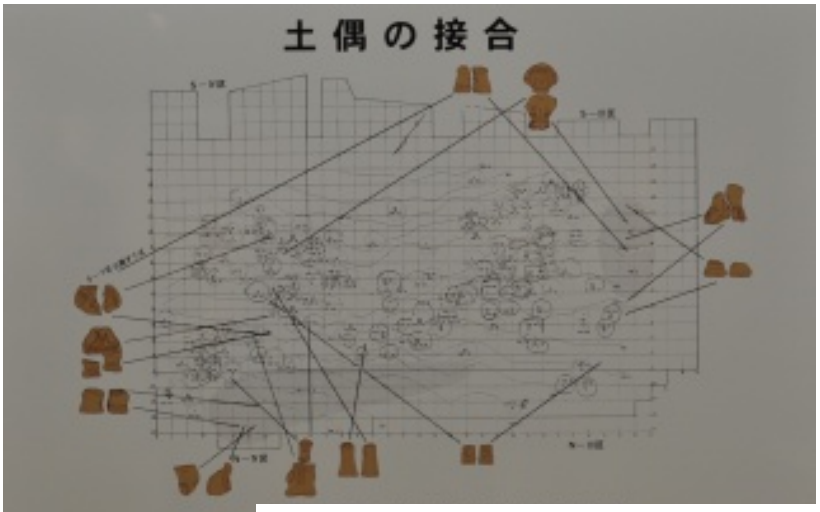
大量の出土数の次に注目しなければならないのが土偶の出土した状況です。大規模かつ慎重な発掘調査の結果、出土した土偶の中で五体満足なものは一つもありませんでした。頭部、胴体、手足がばらばらに壊れて出て来たのです。

研究者たちは掘りだした頭部や胴体や手足を接合して、何とか元の形に復元しようと試みました。土を焼き固めて造ったものですから、首や手足がもげたり、胴体が割れたりすることは当然あるでしょう。しかも数千年もたっているのです。

体の各部がばらばらだというだけなら壊れたのか、壊したのかの区別はつきません。しかし、壊れたものを単に捨てたのなら、近くから壊れた片割れが出てくるはずです。

ところが二つの破片が接合できた例が数例あるだけで、完全に接合できたものは一つもありませんでした。元の姿に復元できたものは皆無だったのです。

さらに重要なことは、たまたま二つの破片が接合できた場合でも、その破片はかなり離れた所から見つかったということです。



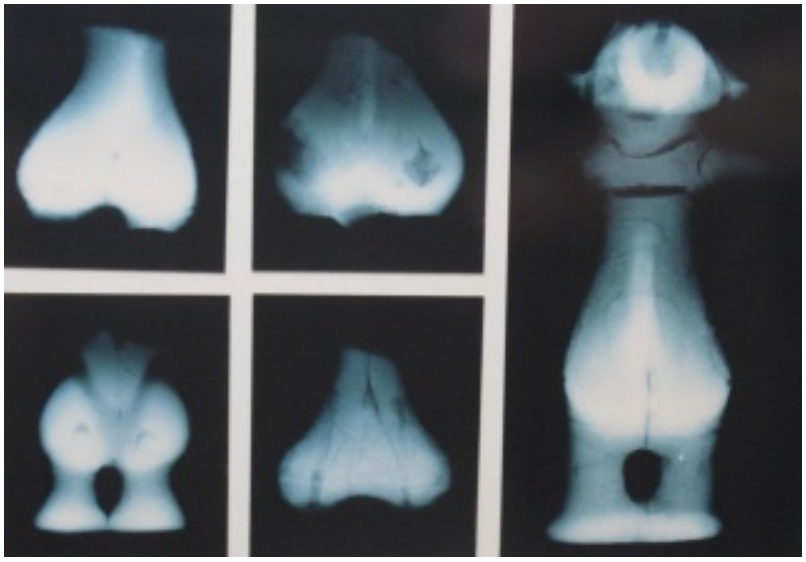
遠く離れた場所の破片が接合したケース

このことから考えられるのは、ただ壊れたから捨てられたというより、土偶は意識的に壊されて、しかも破片ごとに別の場所に捨てられたということです。頭部で見つかったのは一八〇体分しかありません。残りの頭部は発掘調査地の外へ持ち出されたと考えざるを得ません。

土偶の制作法

土偶の大きさはほとんどのものが手のひらに乗るぐらいの数センチ程度です。釈迦堂で一番大きいものは高さ約一七センチです。

同じ土偶の破片が発掘調査地の離れた場所から見つかることから、土偶は意識的に壊され、捨てられたと書きました。それを推測する証拠はほかにもあります。土偶は初めから壊しやすいように造られていたと考えられるのです。



壊れないように造るなら、団子状の粘土の塊を、たたいて延ばしながら、形を整えてゆく方が有利ですが、出土した破片をX線で見ると、いくつかの塊をつなぎ合わせて造っていることが分かりました。あらかじめ特定のつなぎ目で壊れやすいように造ったと考えられます。

右の絵は小野正文さん（博物館元館長）によるものですが、小野さんは「これらの土偶は、破片となる部分が別々の粘土の塊からつくられ、それらを竹や木の芯で接合した上を、

粘土をかぶせて、その上に文様などを付けて仕上げるという、面倒な方法で作られていた」と主張しています。小野さんはこの制作法を「分割塊制作法」と呼んでいます。ちなみに小野さんは甲州市塩山の出身で、私の三年後輩です。

土偶制作に使われているのはロームと呼ばれる粘土質の土です。焼いたときに収縮して、ひびが入るのを防ぐために長石や石英が混じった砂を少し混ぜたものもあります。

制作に適した土を採取して来て、不純物を取り除き、良く捏ねて生地を整え、整形し、文様を施し、場合によっては顔料を塗り、乾燥させた後に焼き上げる訳ですから、手間も暇もかかります。

博物館で夏休みに開かれたは子供のための土偶作り教室を覗いたことがあります。博物館の学芸員が指導しながら造っていますが、粘土が用意されていても、形ができ上がるまで二時間以上かかっています。乾燥させるにも一週間ほどかけて、博物館の裏庭で焚き火をしながら焼き上げます。

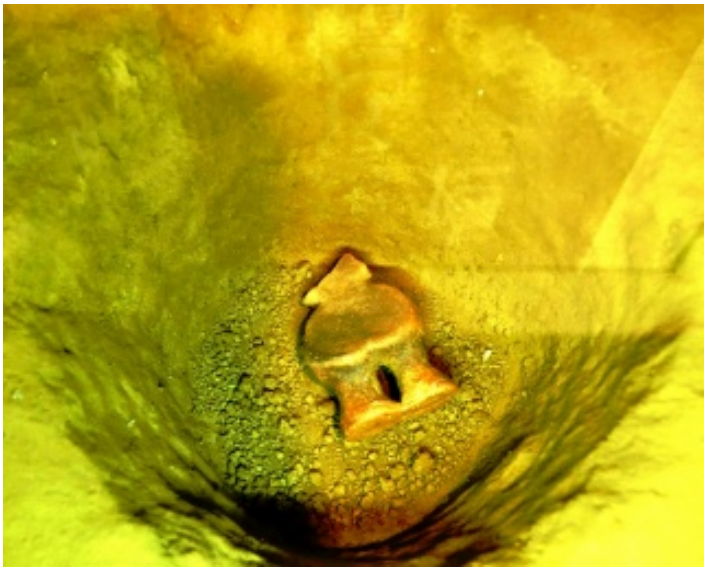
子供たちが造った土偶の表情も遺跡から出土した土偶のように豊かでバラエティに富んでいました。縄文人たちも、ムラの何人かが集まってワイワイ言いながら土偶作りに取り組んだのでしょうか。手本となる土偶があっても、手作りですから造り

手によって少しずつ違った表情のものができあがることは縄文時代も今も同じです。

博物館の展示で面白いのは、遺跡から発掘された子供の指の跡が着いた粘土の塊です。お母さんが土器や土偶を造っているそばで、子供が粘土塊をいたずらして遊んでいる姿が目に浮かびます。

土偶が壊れたら捨てるおもちゃのようなものではなかった証拠がもう一つあります。

それは土偶が見つかった状況です。左の写真は頭の部分が欠けた土偶が発掘された状況を示しています。土偶は住居から少し離れた場所に掘られた深さ三十センチほどの穴の中に横たえられたかのように出て来たのです。まるで哀惜の念を込めて死者を葬るかのように丁寧に埋められています。首が欠けた土偶を捨てるために、わざわざ穴を掘り、埋め戻しているのですから、不要になったものをポイ捨てするのとは明らかに違います。なんらかの宗教的な意味を持つ呪物として埋めたと考えたくなります。



土偶とは何か、謎は深まるばかりですが、土偶を考えるときに、釈迦堂遺跡のものばかりを考えていたのでは限界があります。これからは少し視野を広げて、日本各地で出土した土偶を、時代を追いながら見てゆくことにします

土偶の変遷　草創期から中期

私の書棚には一九八九年に学習研究社から発行された『人間の美術』という美術書が全巻揃っており自慢の蔵書の一つですが、この第一巻は梅原猛監修の『縄文の神秘』で、土

偶の写真がたくさん載っています。美術の本でなんで土偶なのかと不思議に思われる方も多いと思いますが、縄文土器や土偶が日本で注目されるようになったのは、岡本太郎の縄文土器論（一九五二年）がきっかけなのです。

岡本は東京国立博物館に展示されている土器や土偶を偶然目にして強い衝撃を受け、その時の気持ちを次のように書いています。

「縄文土器に触れ、私の血の中に力が噴き起こるのを覚えた。濶然と新しい伝統への視野が開け、我国の土壌の中にも掘り下げるべき文化の層が深みに潜んでいることを知ったのである。民族に対してのみではない。人間性への根源的な感動であり、信頼感であった」

岡本太郎はこの土偶から「太陽の塔」のインスピレーションを受けたと言われます。

それはさておき、梅原猛が監修した『縄文の神秘』の「第四章・土偶の神秘」の冒頭を飾るのは釈迦堂遺跡から出土した、たくさんの土偶の破片を並べたものです。わが故郷の釈迦堂遺跡抜きには土偶は語れないことの証明で、なんとなく嬉しくなります。

まず土偶の歴史的な変遷ですが、現在のところ日本でもっとも古いとみなされている土偶は、縄文草創期（約一万二千年前）のもので、三重県の粥見井尻遺跡や滋賀県の相谷熊

原遺跡の土偶です。

胴体からの小さな突起があるだけのシンプルな塑像ですが、特徴的なのは両方とも優美な胸のふくらみをもっていることです。草創期や前期の土偶には顔や手足の表現はありません。しかしこれらが縄文中期に隆盛を迎える土偶と同じ目的を持ったものなのか、土偶と呼んでよいのか疑問視する学者もいます。

なぜなら、このような縄文草創期や早期の土偶はきわめて珍しく、出土例もあまり多くありません。縄文中期（五千年前～四千年前）との間には七千年もの歳月が横たわっています。もう少し間をつなぐ土偶がたくさん出てくれれば、はっきりすると思います。

土偶は縄文前期末から中期にかけて関東から東北にかけて全盛期を迎えます。前期に造られたものは小型でやや厚みがある平板状が特徴ですが（右の写真）、顔や手や足の表現がみられるようになります。まだ目鼻は明確には表現されていませんが、右上の黒い土偶はなんとなくそれらしいものが現れています。

中期に入ると、前期のシンプルな板状の土偶が、東北地方では装飾性豊かな十字形土偶として発達する一方、関東・中部地方では立体的な全身立像が誕生するなど、地域性もみられるようになります。

左の土偶は三内丸山遺跡で出土した十字形土偶と呼ばれるものです。脚はありませんが、逆三角形の顔に目や鼻や口や耳が明確に表現されています。また胴部には乳房と臍と見られるふくらみがあります。前のものに比べると大型化していることも特徴です。十字型土偶は初期の板状土偶の系譜を引くものだということは、その形の類似性からもすんなり

理解できると思います。

山梨でも縄文前期に主流だったのはやはり板状土偶でした。しかし東北地方とは違った発展を遂げます。中部高地では縄文時代中期になると、釈迦堂遺跡の土偶のように両脚で立つことができる立体的な土偶に変化して行くのです。

この変遷を裏付ける面白い発見が一宮町のとなりの御坂町桂野遺跡でありました。山梨県埋蔵文化財センターが発行している遺跡トピックスに載っていたのが次の図です。

桂野遺跡で見つかった土偶には、上部に指のようなものが付いていますが、これは髪の毛を表わしており、顔はその裏側の何もない部分にあたります。

頭の部分を表現しようとしていますが、まだ表現は稚拙で、そのほかの部分もたんに筒状になっているだけです。しかしこの土偶は立たせることができます。一緒に出てきた土器をみると縄文時代前期の終わり頃の土偶だということがわかりました。ちょうど土偶が立体的な姿になる直前の時期です。

桂の遺跡出土の土偶・縄文前期

もうひとつ、やはり隣町の甲州市塩山・大木戸遺跡の縄文前期の住居址から見つかった土偶を紹介します。前の桂野遺跡のものより目鼻立や顔の輪郭がはっきりしてきました。良く見ると、薄い線ですが眉毛も分かります。またこの土偶は、前の土偶と違って二本足が表現されていて、自立しています。

そんなことから、これらの土偶は、前期の板状土偶と、中期の立体的な土偶との架け橋となる土偶だと考え

大木戸遺跡出土の土偶・縄文前期

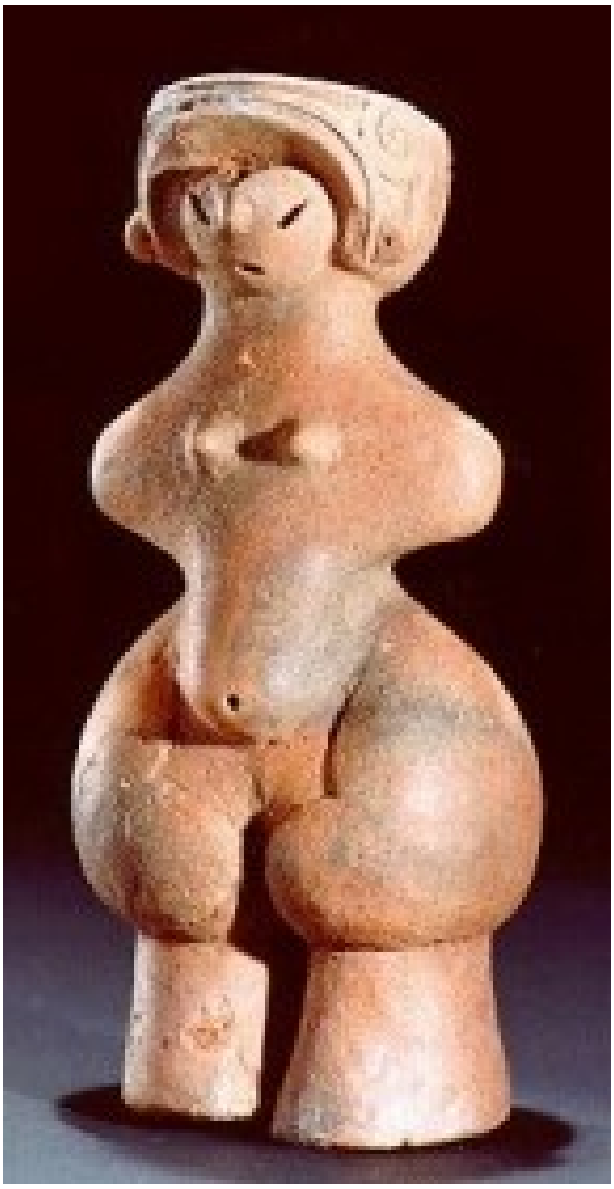
られます。

釈迦堂遺跡の土偶群は縄文中期のもので、手足や頭部を明確に表現し、さらには顔の表情の豊かな土偶が造られた時期に当たりますが、土偶とは何かを考える上できわめて示唆に富む土偶が出土しています。

この土偶は頭部が欠けていますが、両手を後ろに回し、両ひざを曲げた座産という出産中の状態を表したものだと考えられています。下腹部に突き出したものは、最初はペニスだと思われ、珍しい男性像の土偶

かと騒がれましたが、生まれてくる子供の頭がちょうど見えた時の状態を表したものだというのが現在の定説です。

また縄文中期の土偶を語るのに、長野県棚畑遺跡出土の土偶を忘れる訳にはいきません。「縄文のビーナス」と呼ばれるこの土偶は全長二七センチ、横長の顔に切れ長のつり上



がった目は釈迦堂の土偶たちの表情とどこか似ています。特徴は大きく膨らんだお腹と、いかにもどっしりとしたお尻です。

私の腹もこの程度張りだしていますが、このビーナスはメタボリックなのではありません。やはりこれだけお腹が大きいと、妊娠している姿だと考えるのが適当でしょう。

この土偶は縄文中期の土偶の最高傑作として国宝に指定されています。日本最古の国宝であることは間違いないでしょう。長野県茅野市の尖石縄文考古館でいつでも会うことができます。

南アルプス市の鋳物屋遺跡の「臨月のビーナス」も縄文中期前半の土偶です。鳥が羽を広げたような眉と、その眉が鼻と一体化しているところや、釣り上った目が釈迦堂の土偶とよく似ています。

八ヶ岳山麓から甲府盆地にかけて同じような文化を共有する文化圏があり、「富士眉月弧文化圏」と名付けられていると前号で紹介しましたが、土偶の表情からも共通性が浮かび上がってきます。

全国的な土偶の分布を眺めると、中期に山梨を中心とする中部山岳地帯、「富士眉月弧文化圏」で爆発的に流行したものが、中期の終わりごろになるといったん下火になります。そして、後期になると千葉などの南関東に土偶作りの中心は移り、さらに晩期になると、東北地方に流行の中心は移っていった様子が読み取れます。

釈迦堂遺跡の他に多くの土偶が出た遺跡は三内丸山遺跡（青森）一五〇〇体、吉見台遺跡（千葉）六〇〇体、西広貝塚（千葉）一四〇体、立石遺跡（岩手）一八〇体などで、関東から東北に偏っていることが分かります。

土偶の変遷　後期から晩期

縄文後期から晩期になると、各地で実に多彩な土偶が生まれます。

抽象と具象を兼ね備えた土偶が東北地方を中心に展開され、芸術性に優れた中空の土偶も数多く誕生しました。いくつかの例をお目にかけましょう。

これは群馬県郷原で出土したハート形土偶と呼ばれるものです。ハー

ト形の顔に大きな目と鼻が付いています。二つの乳房とそこから下腹部に伸びる体の真ん中の深い線は妊娠線と言われています。ピカソさえ舌を巻くほどの見事な抽象的造形です。岡本太郎の「太陽の塔」はここから着想を得たのではないでしょうか。

次は縄文シリーズ第三弾で紹介した北杜市の考古資料館所蔵の中空土偶です。内部が容器のように中空になっています。骨を納めていたのではないかと推測されています。抽象性がさらに増し、目や口と思われる大きな不気味な穴が印象的です。またハート形土偶に見られる渦巻文が中央部に大きく描かれています。配石遺構から見つかったことで、なんらかの祭祀に使われていたのではないかと推測されています。

ハート形土偶や中空土偶を眺めていると、私は大好きなパウル・クレーの人物画を思い浮かべます。彼の人物像と比べてみてください。なんとなく雰囲気が似ていますね。

クレーは、「芸術とは見えるものを再現することではなく、見えないものに形をあたえることだ」と言っています。縄文人たちが表現しようとした「見えないもの」とは何なのでしょうか。

最後に登場するのは、遮光器土偶です。学校の教科書にも必ず登場し、土偶と言えばこれを思い浮かべる方も多いでしょう。縄文晩期のもので、東北地方で出土することが多い土偶です。この土偶は青森県亀ヶ岡遺跡出土のもので、東京国立博物館が所蔵しており、重要文化財です。

大きな眼窩が特徴で、エスキモーが雪の中で目を保護するために付けるゴーグルに似ていることからこの名前が付けられました。あまりに特異な風貌から一時は地球にやって来た宇宙人飛行士の姿を映したもので

遮光器土偶

はないかという珍妙な説まで唱えられました。

全身に緻密な文様が施されていますし、頭には王冠のような装飾があり、かなり手間暇かけて大切に造られた作品だということが伝わってきます。左脚は見つかっていません。

この土偶でも大きく張った腰とお尻が目立ちますし、小さいながらも乳房の表現もあります。下腹部にあるへそのような穴がだいぶ大きくなっていますが、これは妊娠している状態を表現しているのでしょうか。

丸みを帯びた肩の線や太ももはいかにも女性的な雰囲気を醸し出しているように私には思えるのですがいかがでしょうか。

遮光器土偶は縄文晩期の東北を中心とする文化ですが、南北海道から関東、中部まで広い範囲にわたって出土し、極めてまれには近畿圏でも出土したことがあります。

手作りですから当然全く同じものはありえませんし、少しずつ変化する個性を持っていますが、眼窩の形や短い手足、体中に施された渦巻文様などは共通していて、新幹線も高速道路もない時代に一つの共通した文化が数千キロもの範囲にわたって浸透していたことは驚きです。

遮光器土偶は縄文の土偶文化のフィナーレを飾るもので、稲作が始まる弥生時代を迎えると、土偶は全くといっていいほど造られなくなります。

弥生時代は、稲作の技術をもつ集団がいまから三千年ほど前に列島外から北部九州に移住することによって始まりました。縄文人たちが突然、土偶を造らなくなったのはなぜか、その時、縄文の人たちに何が起こったのでしょうか。その謎を解くには、そもそも土偶とは何かを追求するほかありません。

土偶とは何か　依り代説

土偶とは何かについて考えるときに、いままで紹介してきた土偶の特徴について簡単に整理してみましょう。

（一）乳房や腰や臀部などを強調し、成人人女性を象ったと思われる。

（二）妊娠線と思われる体の中心を縦に走る線、大きなお腹など妊娠した状態を表現しているものが多い。

（三）ほとんどが壊されてばらばらに処分された。壊すことを前提に造られた形跡もある。

（四）数は少ないが、単に捨てたのではなく、明らかに死者を葬るように埋葬したものがある。

（五）初期のものは目鼻や手足の表現がないか、あいまいで単純、平板的。次第に手足や顔の表現が明確になり、中期のものは人間の表情に近い。後期から晩期にかけての表現は地域性が高まり、抽象度が増す。

（六）漆やベンガラで彩色されていたものがある。

（七）土偶が大量に出土する遺跡と全く出ない遺跡がある。

何事にも例外がありますが、以上が土偶の共通項と言えるでしょう。縄文時代は無文字社会です。土偶を造る心情を書き遺したものは当然ありませんし、当時の状況を見たことのある目撃者もいません。土偶とは何かを考えるのは、一つひとつの状況証拠を積み重ね、犯人とその犯行の動機に迫る犯罪捜査に似ています。

証拠は考古学者のみが独占している訳ではなく、私がここで紹介してきたようにだれでも入手できます。たとえば釈迦堂遺跡の発掘の成果は、三冊合わせて一八〇〇ページもの研究報告書が刊行されていますし、素人向けの解説書もあります。

実際に発掘に従事しなくても、かの名探偵エルキュール・ポワロのように灰色の脳細胞を働かせれば、真犯人に行きつくことができるかもしれません。

まず誰でも最初に思いつくのは、土偶は安産のためのお守りだという説です。いまでも日本全国の神社やお寺での安産祈願や子授け祈願は大繁盛です。

さらには南アルプスの前衛・鳳凰三山の地蔵岳のように、古くから子授けに霊験があるとして崇められている山や場所は日本各地にあります。

医療が発展した現在でもお産は女性にとって大事業です。現在残っている最も古い人口統計資料は、ロー

地蔵岳山頂付近の子授け地蔵

マ時代のエジプトのもので、一歳未満の乳児死亡率が千人当たり三二九人とおどろくべき高さです。一七四〇年代のフランスでさえ、二九六人と非常に高かったのです。日本の大正時代でも乳児死亡率は千人当たり百人を優に超えています。

『人口から読む日本の歴史・鬼頭宏著』によると、狩猟採集民だった縄文人はきわめて短命で、平均寿命の推計値は男女とも十四・六歳だそうです。また、一五歳まで生きた男女の平均余命は一六年で、三一歳程度までしか生きのびられなかったと推測しています。

一族の存続のためには、一五歳以上の女性は平均余命いっぱいの一六年の間に、二年に一回の割で出産しなければ集団の存続ができない計算になるといいます。

だから縄文の人たちにとって、出産は一族の集団の存続をかけた、きわめて大切な行為だったのです。安産への願いは私たちが想像するよりはるかに強く切実だったでしょう。妊産婦が亡くなったり、死産だったりということが繰り返されると、思わず何かに祈らざるを得なかったでしょう。

土偶は安産への切なる願いを込めた護符なのです。それではなぜ土偶は壊され、ばらばらに捨てられたのでしょう。それは、土偶が安産を脅かす悪霊や穢れを一手に引き受けてくれる依り代だったからと考えたらどうでしょうか。

日本の民間習俗や神道には穢れを人形に移すという発想があります。人形に息を吹きかけ自分の分身とし、それに穢れを移すのです。

穢れを映した人形は、燃やしたり流したりすることで穢れを祓う訳です。流し雛という風習をご存知でしょうか。災厄を祓うため、人形を自分の身代わりとして川や海に流して

しまうのです。いまでは雛人形は飾ることが目的のように思われていますが、本来は流すことが目的なのです。

また穢れを海や川に流すという思想は、神道にも見いだすことができます。私の地元では毎年、暮れになると組長が各戸を回り、大祓の札を回収して一宮浅間神社に持ってゆきます。

神社では神主が罪、穢れを祓うために祝詞を唱えながら、これらの札を焼きます。この祝詞に登場するのはやはり瀬織津姫という女神です。これらの例を見てもわかるように依り代に罪、穢れを託し、流したり燃やしたりするのは、縄文時代から連綿と日本人が続けて来た習俗なのかもしれません。

余談ですが、釈迦堂遺跡博物館では、出土した土偶のコピーを「どぐうちゃん」として販売しています。やさしそうな表情のもの六体を見本として造ったといいます。安産 のお守りとして買い求める見学客が多く、好評のようです。

土偶とは何か　地母神説

次に紹介するのは土偶は女神だとする説です。

縄文農耕論を唱えた藤森栄一は、土偶は豊かな実りを祈る地母神的な女神であると主張しました。多くの考古学者が縄文時代は狩猟採集の時代だと考えるのに対し、藤森は縄文

時代に焼き畑など原初的な農耕があり、それを証明するものが土偶だと考えたのです。

ヨーロッパや西アジアの新石器時代では、土偶は農耕と密接な関係をもち、実りや多産を祈る地母神崇拝の像として発達してきました。古代人にとって農耕は植物生命再生の神秘のドラマであり、単なる技術ではなかったのです。

女神は植物生命の再生を左右し、農耕社会に豊饒をもたらす原理として崇められました。一九〇八年に、

オーストリアのヴィレンドルフ近くの石器時代の遺跡で発見されたこの小像は、大きな乳房や臀部、膨らんだお腹を持っており、縄文土偶と雰囲気が良く似ています。

女神は栽培植物の再生をつかさどることの類推から、人間自身の死と出産も、さらには季節の交替や、月や太陽など天体の運行さえもつかさどると考えられるようになります。

農作物の豊饒と女性の多産との関係は緊密で、そこではしばしば畑は子宮と、播種や農作業は性行為とアナロジカルに把えられ、死と生とは季節の循環のなかに埋めこまれて、みごとに完結した円環をつくることになります。

このように古代の女神は農業儀礼と深く結び付いているため、狩猟採集時代と考えられる縄文時代の土偶

と結び付けることを疑問視する意見が強かったのです。しかし三内丸山遺跡らの発掘によって、ヒエ、マメ、大型のイネ科種子等が確認され、またクリの管理栽培がおこなわれていたことも確実視されています。

三十年も前に在野の研究者、藤森栄一が主張した土偶地母神説は縄文時代に農業があったという前提に立つものです。そして土偶こそ農業の成立を証明するものだと考えたのです。いま藤森の説にやっと脚光が当たり始めたというところでしょう。

それでは土偶＝地母神説では、土偶が壊され、ばらばらに捨てられることをどのように説明するのでしょうか。これには吉田敦彦という神話学者の強力な援軍があります。

吉田は縄文土偶を、地母神を殺害することにより人間に豊かな恵みがもたらされたという、環太平洋文化圏の農耕社会に広く分布する神話と結び付けます。ハイヌウェレ形神話と呼ばれるこの神話は、インドネシア・セラム島のヴェマーレ族の神話に登場する女神の名前から命名されたものです。

ハイヌウェレ神話にはいろんなバリエーションがあるのですが、概略は次のようなものです。

『ヤシの木の花に、アメタという男が血をこぼしたところ、血を受けた花からハイヌウェレという娘が生まれた。様々な宝物を大便として排出することができた。村の祭りの時、踊りを舞いながらその宝物を八日間も村人に配ったところ、村人たちはうらやましさと気味悪さで彼女を生き埋めにして殺してしまう。アメタはその屍体を掘り出し、切り刻んであちこちに埋める。すると、彼女の屍体からは様々な種類の芋が発生し、人々の主食となった』

イモ類はバラバラにして土に埋めると、そこから新たに増殖します。この連想から、女を殺してバラバラにして屍体を土に埋める→作物に化生する、と考えるようになったのでしょう。

日本の神話でも同じような話があります。日本書紀の保食神（ウケモチノカミ）や古事記の大宜都比売（オオゲツヒメ）をめぐる話がそれです。

保食神を祀る南アルプス市高尾の穂見神社

ここでは日本書紀の女神ウケモチノカミ（保食神）の話を紹介します。

『月夜見尊（ツクヨミノミコト）が天照大神の命令で葦原中国にいる保食神を訪問したところ、保食神は、口から米飯、魚、毛皮の動物を出し、それらで月夜見尊をもてなした。月

夜見尊は口から吐き出したものを食べさせられたと怒り、保食神を斬ってしまった。これを知った天照大神が保食神の所に天熊人（アメノクマヒト）を遣わすと、保食神は既に死んでいた。保食神の屍体の頭から牛馬、額から粟、眉から蚕、目から稗、腹から稲、陰部から麦・大豆・小豆が生まれた。天熊人がこれらを全て持ち帰って天照大神に献上した』

南アルプス市にも保食神を祭った神社があります。櫛形山の中腹・高尾部落にある穂見神社で、商売の資本を与えてくれるというご利益があるということで、関東一円の商売人から篤い信仰を集めています。

神話は全くの作り話ではありません。心理学者ユングが唱えたように、民族の集団的無意識がその底に横たわっているのです。記紀が編纂されたのは八世紀初めですが、縄文時代からの日本民族の伝承や記憶が色濃く神話の中に反映されていると考えられます。

もう土偶＝地母神が壊され、ばらばらに捨てられる理由が分かったと思います。そして釈迦堂や三内丸山といったムラは、死と再生の儀式が毎年のように行われる祭祀の場所だったのではないでしょうか。

祭りが開かれるときには、近隣のムラからも土偶を持った人たちが集まって来たのかもしれません。壊された土偶の一部は縁起物としてムラに持ち帰ったとも考えられます。

つい先ごろ道祖神のお祭りが各地で行われました。どんと焼きでは正月の門松や注連飾り、あるいはダルマを持ち寄って焼きます。焼け残りの枝を家に持ち帰って、炊飯の種火にすると縁起が良いと言われていますが、土偶の破片を持ちかえるのと同じことです。

おわりに

さて土偶とは何かをめぐって、依り代説と地母神説の二つを紹介しました。どちらの説が正しいのか今はまだいえません。

土偶は男性でも女性でもなく、性を超越した霊的な存在と考える学者もいます。状況証拠から土偶とは何かを語ることに禁欲的な学者もいます。事実だけからいえば土偶はヒトガタの土製品としか言えません。想像を豊かにするのは勝手だが、学問と小説は違うというわけです。

しかし、私も土偶を間近に見た時、岡本太郎ように「血の中に力が噴き起こるのを覚えた」のです。縄文シ

リーズ第三弾『石棒と丸石信仰』で「石棒や丸石を精霊の宿るもの、失われてしまった命を再生するエネルギーの源とみなした縄文人の感性は、私が生まれ育った甲府盆地に今も静かに息づいています」と書きました。

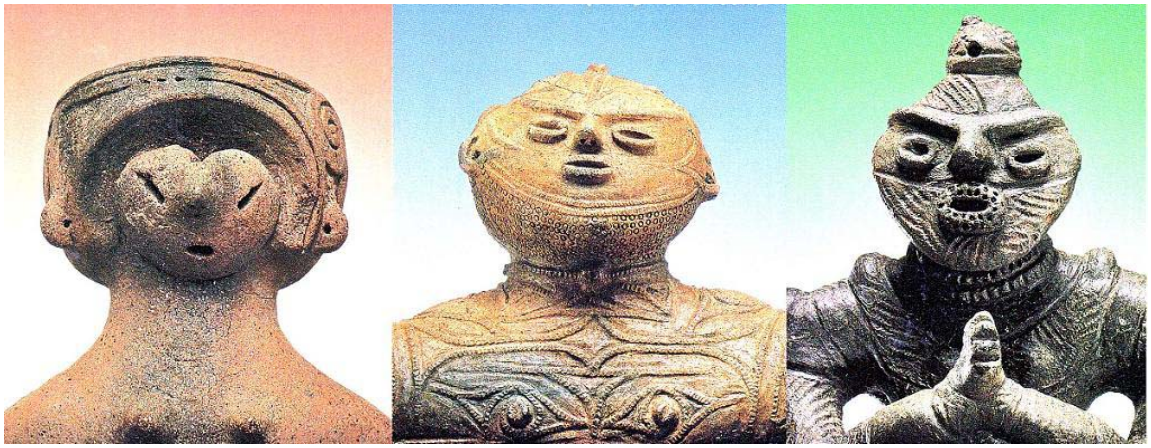
そのことは土偶についても全く同じです。一見、自然から切り離され、近代の科学技術が達成した快適な人工環境の中でぬくぬくと生きている私の魂を揺さぶる何かを、土偶や石棒は確かに持っています。だからこそ私は土偶や石棒についてなにかを語りたくなったのです。

自然に依拠し自然とともに暮らさざるをえない縄文人たちは、生活の秩序を祈りに求めました。自然を、あるいは自然の向こうにあるなにものか祈ることによって生活の安定を図ろうとしました。だからこそ、縄文時代の道具は必然的に祈りに彩られることになります。

そして、土偶はこのような信仰の代表的な遺物なのです。縄文人たちの心のありようは、現在に生きる私たちの心に確かに生き続けています。

fujizakura

注　釈迦堂遺跡博物館は昨年リニューアルされ、展示の一部は変更されています。



国宝の土偶（右から合掌土偶、中空土偶、縄文のビーナス